

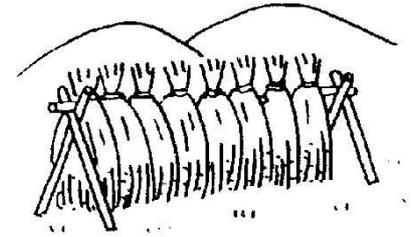
## 百姓の子

映画「七人の侍」に「お前、百姓の生まれだな」というセリフがあります。私も百姓の生まれですので、家業としての農業に子どものころからいやおうなしに関わってきました。母は私に「(学校の) 勉強しなさい」と言ったことがありません。私が放っておいても勉強したから…ではありません。勉強するより農業の手伝いの方が母にとっては大事だったからです。「学校の勉強は百姓の手伝いが終わってからやれ」ということです。祖父が早くに亡くなり、父が病弱だったこともあり、母が一家の大黒柱であり私が貴重な労働力だったからでしょう。母が私を呼ぶときは必ず仕事を言いつけるときです。母が傘寿(80歳)を過ぎ、私が来年還暦を迎えようとする今でもこの関係に変わりはありません。

「学校の勉強は先生の話聞いてさえおりゃわかるが、百姓の仕事はやらにゃわからん」というのが彼女の口癖でした。田おこし、水やり、稲刈り…口で説明するよりとにかくやれ！だめならやり直しでした。

20年ほど前に文部省(現在の文部科学省)は従来の知識偏重教育を改め、体験学習の重要性を謳(うた)いました。しかし、こんなことはうちのばあちゃんは50年前から言っていました。いや、うちのばあちゃんだけではありません。どの家でも家庭教育は「やってみせる」、「いっしょにやる」、「させる」が常識でした。

さて、子どものころの農業の手伝いで私は多くのことを学びました。田おこしでは鍬(くわ)は稲株(いねかぶ)と稲株の間へ打ち込みます。そして、柄(え)をちょっと上へ持ち上げればこの原理で簡単に株が起きます。鍬を引っぱって株を起こそうとすると、おそらく2、3株で体力を使い切るでしょう。稲刈りは刈った4株をひとくくりにしてしばります。その時、4株をまとめてくくってはいけません。2株ずつ交差させるようにくくれば稲はぎにかける時二又に分けやすいのです。稲束の数え方も決まっています。4株のひとくくりが最小単位で「1わ」と言い、12わで「1束」と数えます。



稲運びは重労働でした。小学校高学年では3束、中学校では5束から7束背負うのがあたりまえでした。7束背負えた時は自分の成長と大人に近づいた喜びがありました。(私はこの背負いの労働さえなかったら、身長は180cmになっていたはずです)

皆さんは「はしかい」という言葉を知っていますか。「すばしっこい」という意味の他に、私の地方では稲わらや稲穂のとげが体についた感触を「はしかい」といいます。「かゆい」と「チクチク」がミックスされた感覚です。私にとって稲刈りの思い出は背中の重圧と「はしかさ」そのものです。

しかし、このごろは手で稲刈りする農家は皆無です。「はしかい」という言葉もしばらくすれば無くなるのかもしれない。

(農作業は機械化がすすんだといっても重労働であることはまちがいありません。この時期農家の方々には真に敬意を表します。日々ごくろうさまです。)

